

## 市民と市長のまちかどトーク ボランティア体験談

- 日 時：平成23年8月27日（土）午後2時30分～午後4時00分
- 場 所：ロビンソン小田原店 4階ギャラリー
- 参加者：90名

### ●永井信幸さん

はじめまして。永井と申します。

ボランティアに参加し、既に100日近く経過している。

3月11日の東日本大震災発生以来、テレビなどで被害を報道され、甚大な被害に驚く毎日である。私も何かお手伝いがしたいと考えていた。しかし、個人でボランティアに参加するにはどこにどのように行って、何ができるのかがわからなかった。小田原市社会福祉協議会の方からご案内をいただき、タイミング良く参加させていただいた。多くの方から、「ボランティアに参加して立派だ」などのお褒めの言葉をいただくが、こちらからすればタイミング良く参加させていただいただけであり、お恥ずかしい限りである。

被災地の状況だが、海岸沿いの常磐道は地震と原発の影響で通行止めであった。そこで、内陸の東北道で福島市内から相馬に向かった。全般的には、一般住宅やビルの崩落や損壊はあまり見当たらず、木造家屋の屋根瓦が崩れ、ブルーシートを覆っているのをかなり目にした。また、海岸と平行して走っている6号線バイパスというのがあるが、この6号線バイパスを境にして津波の被害状況に雲泥の差があると聞いた。また、災害のところでも、地形の違いで災害に天と地の差がある。そのような中で、震災当初は人命救助第一ということで自衛隊や消防庁などが活躍していた。道路の瓦礫撤去がされていたが、瓦礫は道路以外の所に積み重なっていた。現地ではボランティアセンターが稼働し、一般のボランティアの方を受け入れていた。私たちもここに毎日登録し、ボランティアの要請があるところに派遣された。短い期間であったが、活動内容をご紹介します。

初日と2日目は、臨海工業団地で材木会社の瓦礫や土砂の撤去を行った。ス

コップなどの人力作業で本当に人間の非力さを痛感させられた。それに比べて津波の猛威にはただ驚かされるだけであった。フォークリフトが流されたり、10人でも持ち上がらない鉄扉が紙のように飛ばされたり、大きな丸太があらこちらにつきささっているのを片付けた。

3日目は海近くの松川浦のパークゴルフ場で、土砂のガラス片の撤去を行った。パークゴルフ場は3月12日に全国大会が開催される予定だった。東日本大震災が12日ではなく、11日に発生したのは不幸中の幸いであった。パークゴルフ場の管理人さんは、津波が襲ってきたときの音は生涯聞いたことがないほどの衝撃音だと言っていた。避難所にいらっしゃるご高齢の方は、パークゴルフ場に行くことを唯一の楽しみにしているので、秋までには再開したいとおっしゃっていた。

4日目は、農家のヘドロの土砂の除去をした。入口は塀で囲まれているので、幸い母屋は助かった。自衛隊は表通りの道路の土砂は撤去するが、裏までは対応できないので、人力作戦で土砂を撤去し農家の皆さんに喜ばれた。

最終日の5日目は、アルバム写真の洗浄作業を行った。自衛隊の捜索作業は、人命救助が第一で、その際、目に付いた位牌やアルバム写真があれば回収するが、それ以外は回収しないということで作業を進めたそうだ。

アルバム写真を1箇所を集め、1つずつきれいに洗浄と乾燥をした。3週間、アルバム写真の洗浄作業のボランティアに携わっていた方にお話を伺ったところ、ご高齢の夫婦が写真を展示している場所にいらっしゃって、一生懸命写真を探していたそうだ。遂に探していた写真を1枚だけ見つけた、その唯一残った写真を娘の遺影にするということであった。

相馬市へ行ったが、被災状況は「市長の被災地レポート」で見て取れる。

私の実家は神戸で、阪神・淡路大震災に遭遇した菅原市場の近くだが、同じような状況でボランティアに出かけた。家屋やビルがめちゃくちゃに倒れて喪失していた。大津波によって全てが奪いさられてしまい、この世のものとは思えない、その場で声すら出ない状況だった。こればかりは、運であると思った。先程、加藤市長からお話があったが、相馬市と小田原市は二宮金次郎先生の関係で普段から交流が盛んであると聞いている。この交流があつてこそ、このボランティア体験ができたのだと思う。私も個人的に近所付き合いを大切にして、

普段からの助け合いに努めていきたい。

最後に、次の3点を皆さんにお勧めしたい。1つ目は、個人でも日常生活に欠かせないものは予備を含めて、傍に確保しておくことである。入れ歯、補聴器、眼鏡などである。阪神・淡路大震災は早朝に発生した。運良く助かった方の話だが、入れ歯がないのでご飯を食べることができなかったということを知ったことがある。救援物資は、共通的なものしか届かない。個人的なものは手元に届くまで時間がかかる。地震が発生すると床が潰れる可能性があるので、寝室の片手で届く範囲に日常生活に欠かせないものを置いておくのがよい。2つ目は、家族と避難集合場所を話して、実地見聞をするとよい。津波で避難場所が流されてしまう可能性があるため、避難集合場所の第2、第3候補を決めておくのがよい。3つ目は、家族や親戚、知人の電話番号や住所を紙に書いて持っておく必要がある。携帯番号もわからない可能性がある。一番頼りになる親戚の電話番号などがわからないと困ってしまうので紙に書いて、子どもさんにはお守り袋のようなものの中に入れてほしい。

ご清聴ありがとうございました。

### ●建築指導課 昨野主事

東日本大震災と題して、報告させていただく。

宮城県石巻市避難所運営支援員としてゴールデンウィークを挟む9日間で派遣された。そこで、私は避難所の運営を任された。

石巻市の概要を簡単に説明する。宮城県第2の都市、人口約16万人、面積は小田原市の約5倍、今回の震災で死者行方不明者が合わせて約4,000人、これは石巻市の人口の2.5パーセントに相当する、甚大な被害である。

写真にて被災の状況を確認する。駅から市街地を越えて南へ約2キロの振興住宅街と工業地域の様子である。丘の上から振興住宅街と工業地域を見下ろすと、ほとんどの建物が倒壊していた。実際に振興住宅街に入ると、鉄骨造と呼ばれる鉄のフレームを持つ建築物のみが建っている。木造建築物は全て津波で流されてしまった。基礎と土台のみが残っている。

避難をしている方から、津波で押し流された船舶や工業地帯で油類を保管するタンクの漂流物によって自宅が最終的に倒壊したと聞くことができた。

まちなかでは、家の倒壊は免れたが、壁面に遺体が安置のメッセージが残されていた。「消防や自衛隊に対してよろしくお願いします」というメッセージが書かれており、非常に心が痛んだ。

被害の状況と震災以前に作成された石巻市のハザードマップをみると、大きく異なっていたことがわかる。実際には、港の沿岸部から入って8キロの位置まで浸水した。

また、私が避難所を見て、避難所によっても生活状況が大きく異なっていることがわかった。A避難所は被災された方が地域に集まって地域の小中学校で暮らしている。こちらは、住民による自治が盛んに行われていた。結果として、行政やNPOなどの支援が手厚い地域である。校庭にはNPO法人のボランティアセンターがあり、住民達は校舎で暮らしている。3メートルの津波で被災し、1階部分は電気、水道含めてインフラは全滅している。日本赤十字社の診療所、ボランティアによるお風呂、ボランティアによるコンサートが行われていた。このようなことで、被災された方の気分も非常に盛り上がっていた。食事をご紹介します。朝食はパン、牛乳、補助栄養食品。昼夜は、自衛隊の暖かい炊き出しが行われていた。

一方、B避難所はもともと沿岸部に住んでいたが、沿岸部に避難ができずに相当遠くに離れた内陸部の被災していないエリアに避難してきた。ここでは住民による自治が行われていない。つまり、行政による支援のみである。体育館でプライベートの空間を確保されない生活をしていた。少ない支援物資が体育館のステージに乗っていた。かろうじて自衛隊によるお風呂が用意されていた。B避難所の食事だが、朝食はパンと牛乳、補助栄養食品。昼夜は、昼夜あわせたものと牛乳とジュースが1日約1,500円で賄われている。

また、A避難所においては行政、自衛隊、NPO活動で提供された食事を地域の住民達に積極的に配って歩いていた。更に、インターネットで足りない物資・支援について自ら情報発信をしていた。例えば、5月5日へ全国に向けた「感謝のメッセージ」はNHKとフジテレビ系列には全国放送されている。そして、班長会議により意見を集約し、行政やNPO要望していた。自ら支援の

受けやすい土壌を作っていた。班長会議の様子では、住民の班長、リーダーのみならず、行政の班長、NPOのリーダーなど昨日あった出来事、今日の予定などすべて住民達独自で決めていた。住民同士のトラブルも班長会議で決めていた。

最後になるが、現地に赴いて一番強く感じたことは、避難所での団結力、コミュニティが重要だと感じた。

災害に強い行政を作り、皆さんで有事に備えていきたい。